volume 115
OCTOBER 2010

HABATAKI
はばたき
UNIVERSITY OF SHIZUOKA

Yada 52-1,Suruga-ku,Shizuoka 422-8526 Japan

inside NEWS

●CONTENTS●

真夏のオープンキャンパスへようこそ！……1
県民の日イベントを開催……2
USフォーラムを開催……2
産学連携
・フーズ・サイエンスフォーラムへの参加……3
・「第60回記念産学官交流」講演会・交流会への参加……3
日本薬理学会関東部会を開催して……3
グローバルCOEプログラム
・ＮＺとの共同研究の推進……4
・ＳＨＥＰ……5
リール政治学院留学体験記……7
トルコ　ボアジチ大学留学……8
キャンパス・フリートークカフェの開催……9
理事長が公務員志望者に講義……9
名誉教授の紹介、教員人事……9
科学研究費の研究機関別採択率が全国27位に……9
「女性のための健康薬理学」を開催して……10
ひと　日本の韓流現象をリサーチしてこのほど帰国……10
奨学金をありがとうございました……11
受賞……13
夏休みファーマカレッジを開催……14
オープンレクチュアを開催……14
サマースクール＆富士山フィールドワークを開催……15
「静岡かがく特捜隊 夏祭り in アクト」に出展……15
サイエンスフェスティバル in る・く・るに参加して……16
夏休み親子環境教室を開催……16
図書館だより……17
活躍する卒業生・修了生……19
エスパルスホームゲームで県大をＰＲ！……19
オープンゼミの企画・運営で学んだこと……20
ゼミ活性化プロジェクト「Party lab.」開催……20
スウェーデン視察報告……21
県大生ピックアップ！……22
星・木苗杯開催される……22
「Let's ちょっと Chat!2010」開催……22
夢のエコパスタジアム……23

ー真夏のオープンキャンパスへようこそー

8月7日㈯、9日㈪、10日㈫、11日㈬及び12日㈭の5日間、オープンキャンパス2010を開催しました。学部紹介・入試説明・学生生活の紹介・在学生との懇談会・キャンパスツアー・模擬講義など、各学部が趣向を凝らしたプログラムを実施し、高校生や保護者など約4,000人の参加者で賑わいました。

初めての試みとしては、食品栄養科学部栄養生命科学科3年生がプロデュースした「県大まるごとランチ」の販売、国際関係学部学生実行委員会組織による学生主体の企画・運営、クラブ・サークルの協力によるサークル紹介、図書館による図書館見学ツアーを行い、新しい情報を発信することができました。

アンケート結果の満足度を見る限り、参加者からは全体的に高い評価を得ており、「学生生活が楽しそう」「教員、学生の応対が良かった」「県大に入りたい気持ちが高まった」などの感想をいただきました。反面、参加者に占める保護者の割合が3割を超えたことを踏まえ、高校生、保護者、それぞれのニーズに即した新たな対応が必要だということを感じました。

参加希望者数が年々増える一方、大学側の許容量には限りがあり、そのバランスを保ちつつ、参加者の期待にいかに応えていけるか、アンケート結果の分析を通して検証を行い、来年度へ繋げていきたいと考えています。

薬学部　キャンパスツアー

食品栄養科学部　研究室訪問

国際関係学部　座談会

経営情報学部　体験授業

看護学部　妊婦擬似体験

サークル紹介

県民の日イベントを開催

私たちのふるさと静岡県が現在のような形でスタートしたのは、1876年８月21日。そこで、“いま”の静岡県はもちろん、“過去”の歴史にふれたり、“未来”の姿を考えたり、静岡県を身近に感じる機会になればと、８月21日㈯を中心に県内各地で色々なイベントが開催されました。本学では、「キャンパスツアー」「環境科学研究所一般公開」が行われ、短期大学部では、「健康度測定フェア」「大学見学会」が行われました。

キャンパスツアーは、県民の方々に対して、学内を見学してもらい、県大に親しみを持ってもらうことを目的に開催しています。今年は８月20日㈮に開催し、県内各地から、また県外からも計112人の方にご参加いただきました。参加者は４グループに分かれて、大学職員の誘導により各学部棟や図書館を見学しました。参加者からは、「赤レンガの建物がとてもきれい」「教え上手の先生が多い」「子供の将来の道しるべとすべく良い目標ができた」などの声が聞かれました。

環境科学研究所は、８月21日㈯に一般公開を行い、身近な環境問題を楽しく体験できるよう、12研究室の体験実験やクイズ、イベントなどを実施しました。当日は、高校生や親子連れなど約200人の参加があり、一日がかりで全ての研究室を回った家族や高校生も少なからずいらっしゃいました。「年１回の開催では少ない」という嬉しい意見もいただきました。

短期大学部では、８月20日㈮に健康度測定フェアと大学見学会を行い、小鹿町内会住民の方々や高校生等に参加していただきました。健康度測定フェアでは、体成分分析、骨密度測定などを行い、希望者に本学教員による健康・歯科・介護・食事相談を行いました。また、大学見学会では高校生と保護者の方を中心に、キャンパス内の施設見学と進学相談を行いました。

〔キャンパスツアー〕乳児の聴診体験

〔環境科学研究所一般公開〕

〔短期大学部〕進学相談

ＵＳフォーラム2010を開催

ＵＳフォーラム実行委員長　出川雅邦

８月３日㈫に、ＵＳ(University of Shizuoka)フォーラム2010が開催されました。

今回のフォーラムでは、平成21年度に採択された学内の研究費（理事長特別研究費、教員特別研究推進費、学部研究推進費）による教育研究成果について、口頭発表30件、ポスター発表43件、誌上発表206件、合わせて279件の発表が行われました。また、平成20年度に文部科学省から採択されたグローバルＣＯＥ拠点および文部科学省ＧＰ(Good Practice)プロジェクトについて、それぞれの活動状況等が報告されました。

本フォーラムは学外の皆様にも広く公開されており、本学教員、学生はもとより一般県民、企業関係者の皆様を含め265人の方々が熱心に聴講されました。

次年度のＵＳフォーラムでは、より多くの方が参加され、より実り多く活気あるものになることを期待しています。

冒頭の学長挨拶

口頭発表

産学連携

フーズ・サイエンスフォーラム（技術相談会）への参加

静岡県・静岡市・焼津市・藤枝市・㈶しずおか産業創造機構主催の「フーズ・サイエンスフォーラム」が７月１日㈭、静岡県コンベンション・アーツセンターグランシップで開催されました。

本フォーラムでは、木苗学長がフーズ・サイエンスセンター長として策定した「フーズ・サイエンスヒルズプロジェクト戦略計画」を説明し、より多くの企業、関係大学、研究機関等がプロジェクトに参画するよう呼びかけたほか、講演会や大学の産学連携担当者、マーケティング専門家による個別相談会が開かれました。

フォーラムの様子

「第60回記念産学官交流」講演会・交流会への参加

７月16日㈮、静岡市清水産業・情報プラザ主催の「産学官交流 講演会・交流会」が、静岡商工会議所静岡事務所で開催されました。

今回は記念すべき60回目の交流会で、木苗学長が「産学民官連携を目指す本学のチャレンジ」をテーマに、食品栄養科学部の増田修一准教授が「日常食品中に含まれる変異・発がん物質の毒性とそれに対する静岡県地場産品による抑制効果」をテーマに講演しました。

増田准教授の講演

木苗学長の講演

第122回日本薬理学会関東部会を開催して

薬学部・薬学研究科　教授　山田静雄

去る６月４㈮～５日㈯に表題の学会と第14回神経科学領域における分子モニタリングシンポジウムを本学で開催しました。近年目覚ましい進歩が見られる機能性タンパク質の基礎研究と、それらを基盤とした病態解析や創薬、新規治療法開発に繋げるための最新の研究成果の発表を主眼としました。特別講演として、宮崎大学医学部の中里雅光教授に「機能性ペプチドの臨床応用の実際」と題して最新の知見を、山梨大学医学部の小泉修一教授には、「グリア細胞制御タンパク質ＡＴＰ受容体と脳機能」と題して脳疾患治療の最新情報をご講演いただきました。また、「再生医療および中枢性機能疾患における神経分化制御とエピジェネティクス」「抗血栓薬の可能性を探る」のシンポジウムと一般講演を行い、活発な討議が行われました。２日間で学内を含め200人を超える皆様にご参加いただきました。本会の開催にあたり協賛いただいた本学グローバルＣＯＥプログラムに深謝いたします。

特別講演の様子

グローバルＣＯＥプログラム

－ ニュージーランド（ＮＺ）との国際共同研究の推進 －

グローバルＣＯＥプログラムとは、文部科学省による国際競争力のある大学作りのための事業で、本学は静岡県下唯一の採択校です。

◉ ＮＺ国立植物・食物研究所との国際共同研究の推進【６月14日㈫】

薬学部・薬学研究科　教授　山田静雄

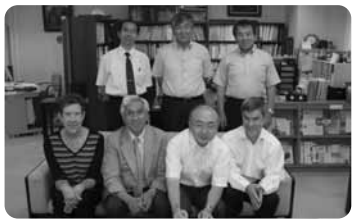
本学の客員教授であるスキナー博士が来学し、ＮＺ産果実抽出物を用いた国際共同研究の成果発表会を開催しました。博士は、機能性食品の健康増進効果、新規機能性食品の研究開発を手がけ、現在は、ＮＺ国立植物・食物研究所主席研究員およびＮＺマッセー大学客員教授として機能性食品の基礎研究から臨床試験まで広範囲な研究に携わっています。今回の成果発表会では、同研究所における研究成果や今後の展望、指針等をご講演いただきました。また、ワークショップでは、薬・食の観点から４人の大学院学生や若手研究者が共同研究の成果を発表し、活発な討論を行いました。途中、会場内の席が足りなくなるほどの盛況ぶりで、今後、本拠点の研究プロジェクトにおける機能性食品の基礎及び応用・開発研究を一層推進させる上で、有意義な集会となりました。

スキナー博士による講演会

◉ マッセー大学食品・栄養・健康研究所との部局間交流協定締結【７月９日㈮】

食品栄養科学部・生活健康科学研究科　教授　中山勉

マッセー大学食品・栄養・健康研究所のアーチャー所長とクルーガー部長およびＮＺ研究科学技術省の職員が来学し、同研究所と本学の薬学部および食品栄養科学部との間で、学術と研究者の交流および共同研究、シンポジウムの開催等を目的とした部局間交流協定を締結しました。協定締結式後の記念講演会では、同研究所の説明や、彼らの専門分野である食品工学や栄養生理学に関する研究発表が行われ、薬学部の板井茂教授、食品栄養科学部の新井英一准教授も発表し、各々の成果について討論しました。活発な意見交換を通じて多くの交流が図られ、今後の研究活動に弾みがついたのではないかと思います。



協定書の調印式
（前列左端がクルーガー部長、同右端がアーチャー所長）

◉ 若手研究者との交流事業【７月15日㈭－16日㈮】

食品栄養科学部・生活健康科学研究科　教授　合田敏尚／大島寛史

ＮＺの国立大学８校と８つの国立研究所から選抜された９人の若手研究者を含む、総勢12人の訪問団を迎えました。彼らは日本の教育研究機関の視察を目的にＮＺ研究科学技術省より派遣され、北海道大学や三重大学等を見学し、最後の訪問地となった本学では、大学院学生が中心となった研究発表会を開催しました。本学の６人の若手研究者が日頃から「科学英語プログラム」等のＣＯＥ関連科目で培った英語を用いて各々の研究成果をプレゼンテーションし、その後の質疑応答や交流会においても活発な意見交換を実施しました。また、相互の研究者がより深い討論を図れる様に研究室や教室訪問の時間を十分に設けたことにより、双方にとって実の多い交流事業となりました。

後日、訪問団のコーディネーターより、「貴校でのプログラムは細部までお心配りいただいたものであり、参加したニュージーランド研究者は全員大変感激しておりました。共同研究の可能性を見いだした者も多くおり、これからますます貴校とのお付き合いが深まることを期待しています。」との感謝のメールが届きました。

木苗学長（前列中央）とＮＺ訪問団一行

静岡健康科学英語研修プログラム
Shizuoka Health Sciences English Program (SHEP)

ＳＨＥＰとは

静岡健康科学英語研修プログラム（Shizuoka Health Sciences English Program, SHEP）は、静岡県立大学グローバルＣＯＥ「健康長寿科学教育研究の戦略的新展開」の教育推進の一環として、米国オハイオ州立大学（ＯＳＵ）で行われる６週間の海外英語研修です。大学院薬学研究科と生活健康科学研究科の博士後期課程に在籍する大学院生が対象であり、学生が国際学会で円滑に論文発表を行い、海外の研究機関を訪問し先端の研究者たちと学術交流を深め、専門分野でグローバルに活躍するために必要な科学英語コミュニケーション能力を向上させることを目的としています。

ＳＨＥＰに参加して

大学院薬学研究科博士後期課程２年　藤木定弘

大学院生として研究生活を送る中で、英語力の向上の必要性を常々感じており、ホーク先生の授業や吉村先生によるディクテーションの課題提出を通して学習を続けてきました。そして更なる英語能力、特にプレゼンテーション能力の向上を目的とし、今回、グローバルＣＯＥプログラムの一環であるShizuoka Health Sciences English Program（ＳＨＥＰ）に応募し、ＴＯＥＦＬテストと面接を経て、幸いにもプログラムに参加することができました。

プログラムの中心は毎日３時間の授業です。講師のBill先生には大変丁寧に指導していただき、また授業中、休憩中、授業後に関わらずどんな些細な質問でも丁寧に対応してくださりました。授業はディクテーションやimpromptu speech（即興の３分間のスピーチ）、テキストの文章についてのディスカッション、また全５回のプレゼンテーションが主な内容でした。その中でも特に思い出深いのがプレゼンテーションです。前半２回は私達の研究分野に拘らない自由発表、３回目は研究の背景を発表、４、５回目は研究内容についてのポスター発表、オーラル発表を行い、さらにそれぞれの発表前後にBill先生との個別指導を設けて頂きました。その一連の過程から、今後、国際学会等で研究発表をする際の注意点を理解でき、大変貴重な経験となりました。

このプラグラムを通じて劇的に英語が上達したわけではありませんが、今後の勉強方法や話す上での注意点などを理解することができ、さらにカンバセーションパートナーやＡＬＰ（American language program）の学生などプログラム修了後も連絡をとりあう友人を得られ、非常に有益な経験になったと思います。

最後にこの場を借りまして、本プログラムに携わった静岡県立大学ＧＣＯＥ関係者の皆様、またBill先生、Gary Whitby先生、中山先生をはじめＯＳＵ関係者の方々に深くお礼申しあげます。

修了式にて（上段左側から中山先生、石井、藤木、高娃、内本、SAHA、ビル先生、中段左側から吉村先生、NGUYEN、手前が中野）

授業の様子

コミュニケーション能力の向上

大学院薬学研究科博士後期課程３年　Repon Kumer SAHA

私達は、カンバセーションパートナーと常に英語で会話をし、講師のBill先生が指導してくださったように、アメリカ人がどのように英語で会話をするのかをいつも心がけて学ぶようにしていました。また、私は、Kristy M. Ainslie, PhDを訪問する機会にも恵まれ、彼女の研究について聴くことができました。このプログラムに参加することができ、日常的に英語を使うことによって、英語のコミュニケーション能力を向上することができたと思います。

初めてのアメリカ

大学院生活健康科学研究科博士後期課程２年　高娃

今回の英語の研修で訪ねたのは、アメリカのオハイオ州で、私にとって初めてのアメリカ滞在でした。６週間の短い期間でしたが、普段お会いできない方々との交流が出来て、本当に有意義でした。英語の授業を通して様々なことを学び、将来に向けて知識や技術を蓄える上で非常に役に立ったと思います。また、研究室の見学と、教授との研究に関する討論が良い体験になりました。いろいろなお話を聞かせていただいて、自分の勉強不足を実感した一方で、これからの人生をより良いものにするために、さらに勉強したいという思いを強く感じるきっかけとなりました。このような貴重な体験ができたことにとても感謝しています。これからも信頼される良い研究者を目指して、常に勉強や研究に励んでいきたいです。

ＯＳＵでの研修を終えて

大学院薬学研究科博士後期課程１年　内本武亮

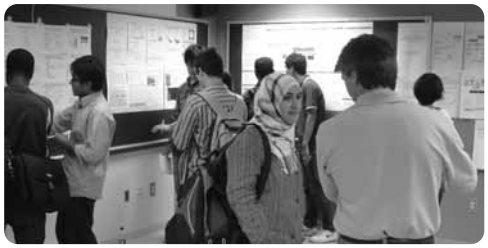
ＴＯＥＦＬと英語での面接を経て、私たちは、⑴科学英語コミュニケーション能力の向上、⑵研究室訪問・オハイオ州立大学の若手研究者や大学院生との学術交流、⑶異文化社会の理解を目的とし、６週間という限られた時間の中で、精一杯、貪欲に取り組んできました。

授業では口語的な発音の仕方、例えばwant to→wannaのようなreductionや正確な発音、話のなかでのアクセントやリズムについて学びました。授業後にはConversation partner（ＣＰ）の指導を受けながら、授業で習った内容をすぐに実践として復習することができ、効果的に英語を学習することができました。また、Romstedt先生、Bird先生、McKay先生には、がん、亜鉛と生体との関係、Drug Discoveryなど様々なトピックについて講演をしていただき、さらには、聞き手に興味を持たせるための話し方の工夫を学びました。College of MedicineのSaji先生には、研究室の最新の研究成果や施設を紹介していただき、英語耳を鍛えるだけでなく、米国での研究生活について知る貴重な体験となりました。さらに幸いにも私たちは、希望する研究室に訪問する機会を与えて頂き、私は製剤学分野のFrank教授の元を訪問させていただきました。私自身の研究内容について発表し、マンツーマンでディスカッションできたことは、国際的に通用する研究者という目標に向かうための大きなモチベーションとなりました。

授業後や休日はＣＰと多くの時間を過ごしました。ＣＰの両親にお会いする機会に恵まれ、米国の親子の絆の深さを知ることができました。また独立記念日という素晴らしき日を米国の友人と祝う貴重な体験をし、米国人との愛国心の違いを肌で感じることもできました。その他にも、アフリカや東アジア出身の学生とも交流する機会に恵まれ、宗教や文化の多様性を認識するにつれ、私自身を国際化するためには、語学力は勿論のこと、対話する相手の文化的・社会的背景を認識することこそ重要なことではないか、と考えさせられました。

最後に、本プログラムに携わったＧＣＯＥの関係者の皆様、ＯＳＵの先生方（特に担当講師のBill先生、コーディネーターの中山先生）、ＯＳＵで出会ったすべての方に深く御礼申し上げます。

カンバセーションパートナーと



ポスター発表の様子

授業に参加して

大学院生活健康科学研究科博士後期課程２年　NGUYEN Thi Thu Trang

留学を通じて、私が特に印象に残っていることは授業内容です。授業で使った教材は、非常に解かり易くて、より実践的なものでした。特に、互いの意見を議論し合う教材は、とても印象に残っています。また、通常の授業以外にも、個人レッスンとして用いたCarmenサイトも非常に有用でした。このサイトでは、聴解力を鍛えるための様々なコンテンツが存在し、私の聴解力の向上に役に立ちました。私は、留学を通じて高めた英語力をさらに向上させるため、日本でも英語学習を継続させていきたいです。

OSUでの異国間交流を通して

大学院薬学研究科博士後期課程１年　石井貴之

私はこのプログラムを通じて語学研修ならびに異文化交流に励んできました。様々な場や機会があるなかで、conversation partner（ＣＰ）と過ごした時間からその多くを得られました。ＣＰとは本プログラムが英語で会話する機会を増やすために用意してくださった、砕いて言えば異国の友人です。彼は常に真摯であり、時には先生かと思うほど真剣に英語を教えてくれました。また、お互いの文化、思想、社会について英語で語り理解することは、私の語学力向上に大きく貢献したと思います。彼とは帰国した今でも連絡を取り合い、私のかけがえのない友人の一人となっています。本プログラムは英語力向上だけでなく、私の人生において大切なものを与えてくれました。この６週間で得たものを糧にし、グローバルに活躍できる研究者となれるよう努力したいと思います。このような貴重な機会を与えてくださった関係者の皆様方に心から感謝申し上げます。

研究室訪問で得たもの

大学院薬学研究科博士後期課程２年　中野慎太郎

米国の教授と研究に関して意見を交えて私の考えの幅を広めること、これが短期留学における私の目標の一つでした。不慣れな英語での議論は想像以上に難しく、さらに緊張と委縮が相俟って、初めは教授からの意見及び指摘の一方通行でした。話の中盤、私は勇気を出して、イラストを交えながら、教授の意見に対する私の考えを述べました。その意見は決して優れたものでは無かったです。しかし、それを機に私の意見に対して積極的に耳を傾けてくださり、私も言葉足らずながら必死にアイデアを述べる、密度の濃い議論を交えることができました。決して100％の出来では無かったですが、勇気を出すことで、想像しなかったアイデアや考えを得て、私の研究に対する視野は確実に広がりました。この経験を今後の研究生活の大きな糧とし、私は日々邁進していきます。

リール政治学院留学体験記

国際関係学部４年　熊谷拓也

私は2009年９月から2010年の５月までの約９ヶ月間、県大を離れ、フランスのリール政治学院（以下、略称　ＩＥＰ: Institut d'Etudes Politiques de Lille）で学生生活を送りました。

帰国後、日本の友人と久しぶりに再会すると、第一声に「フランスどうだったー？」と尋ねられます。「たのしかったー。」という言葉が浮かぶ前に、「つらかったー。」という言葉が出てくるのは自分自身どうかと思いますが、正直それが率直な感想です。ヨーロッパ独特の歴史ある街並み、おいしくて安いワインやチーズ、週末になれば友人たちとバーへ繰り出して酒を飲んだり、バカンスにはヨーロッパ中を旅行したりと、確かに思い起こせば日本では得難い貴重な経験も少なくありません。ただ当然のことながら、私の本職は学生。そうした楽しい思い出とは別に、日々授業にくらいついていくことこそが実際の私の日常でした。

ＩＥＰとは普通のフランス人が一目置くような、特殊な入学試験を課す、かなりレベルの高い大学です。そこに集まるフランス人学生も、世界中から集まるような留学生も、教鞭を執る教授陣も、皆揃って意識の高い人ばかりです。フランス人学生たちは、大教室の最前列でノートパソコンを持ち込んで２時間、長ければ３時間（もちろん休憩をはさんでですが…）の授業の間、ひたすら先生の言葉を、一言一句もらさず記録していきます。もちろん手書きでノートを取る学生も同様です。初めて授業に参加したとき、県大の留学経験者の先輩方から噂には聞いていたものの、唖然としてしまいました。そこで、ごく普通の日本人が授業についていくことがいかに難しいか、皆さんのお察しの通りです。

驚いたこととしてもう一つ挙げるとすれば、それは欧州における国境を越えた学生交流の活発さです。ＩＥＰでは三年次の留学が義務付けられており、すべての学生が海外の大学へと派遣されます。そして、その穴を埋めるように、「エラスムス」と呼ばれる欧州間の交換留学を促進する制度を利用して、ドイツ・イタリア・スペインを始めとする欧州各国から多くの学生が集まってきます。現在、世界に例のないような地域統合が進みつつある欧州で、国境を越えた盛んな交流を実際に目の当たりにした一例でした。

私自身、短い期間ではありますが、今回こうした機会を頂いてＩＥＰで学生生活を送れたことを大変誇りに思っています。確かに私にとって、母国語以外の言語で高度に専門的な授業についていくことは大変厳しいものでした。一つの外国語を習得するためには、並外れた努力が必要です。留学を終えた今でも、自分のフランス語力は決して誇れるようなものではありません。ただそれでも、この交換留学の中で得られたものは少なくなかったと断言できます。日本での日常では当たり前すぎて全く気にも留めなかったことを、まったく新しい価値観をもって再考したりと、語学以上に全く異文化の国で過ごしたことで得られたものは非常に大きかったと思えます。もちろんフランスを含めた、ヨーロッパという地域をよりよく知るために、今後も語学の研鑽を続けていくつもりですが、それと同時に、自分の生まれ育った日本という国もより深く理解していきたいです。

また、最後になりますが、こうした素晴らしい機会を与えてくださった静岡県立大学、及びそれを支えてくださったすべての皆様に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

共に学んだ留学生と（筆者は右端）

トルコ　ボアジチ大学留学

国際関係学部３年　細川芽

長く豊かな歴史を持つイスタンブール、アジアとヨーロッパを隔てるボスポラス海峡。イスラム教という日本人にとって身近ではない宗教を信じる人々が暮らす国で、約10ヶ月間を過ごしてきました。お世話になったのは、トルコでも最高レベルの教育で知られる、ボアジチ大学です。ボアジチとは、トルコ語でボスポラスという意味で、その名のとおりキャンパスからのボスポラス海峡を望む景色は絶景でした。ボアジチ大学はトルコの大学の中でも歴史が古く、景色もさることながらキャンパス内の建物や環境も歴史を感じさせてくれて素晴らしかったです。

ボアジチ大学では主に政治学部の授業に参加していました。学生達は皆とても積極的で、講義を真剣に聞くのはもちろんのこと、質問も激しく飛び交い、先生が一度学生を落ち着かせようとしていたこともありました。特に民族問題のテーマを扱っていた授業では、クルド人の問題、周辺の国家からの移民の問題、宗教やムスリムの女性問題など私にとっては今までニュースの向こう側でしかなかったものが、彼らにとっては身近な、まさに自分たち自身の問題であるために、その議論の激しさには圧倒されました。意見を求められた時にははっきりと答え、疑問に思ったことはすぐに質問をする。その意欲の高さに驚くとともに、私ももっと頑張らなければと大きな刺激を受けました。

学外の活動では、ボアジチ大学で日本語を勉強している学生と日本人留学生による、日本とトルコの交流を目的にした日土クラブに参加していました。主な活動は毎週のミーティングでしたが、何度か大きな活動も行いました。そのうちの一つとして、クラブの学生達と同じく日本語を勉強しているチャナッカレ・オンセキズ・マルト大学の学生達と交流し、世界遺産トロイ遺跡の見学に行きました。日本語を勉強している学生達との交流は、改めて日本や日本語について考える良い機会になりました。彼らは日本に大きな興味を持っており、日本についての質問や、日本に来たことがある学生達はそこで見たものについての考えを教えてくれました。しかし、私の方がその質問や意見について何も答えられないこともあり、自分の国についてもっと学ばなければならないと思いました。その他には、トルコ人学生の日本語弁論大会のお手伝いや日本文化週間としてキャンパス内で他の学生達に日本文化を紹介するというイベントを行いました。異国で自分の国や文化について紹介するというのは貴重な体験であり、とても楽しかったです。しかし同時に、英語やトルコ語といった母語でない言葉で日本独特の文化についてどう説明するかということの難しさを感じました。

この留学は、外国に行きたい、知らない世界を見てみたいという好奇心から始まりました。その中で、今までとは全く違う文化や生活を経験し、国境を越えた友人がたくさん出来たことで自分の視野が広がったことを感じます。このような機会を与えていただけたことに、そしてサポートをしてくださった方々に深く感謝申し上げます。

ボアジチ大学のキャンパスから見た
ボスポラス海峡の景色

日本文化週間のイベントにて

キャンパス・フリートークカフェ（通称：はばたきカフェ）の開催

木苗学長の発案で５月から月に１回、谷田キャンパス内に学生と学長、教職員とが自由に語り合う場を設けています。平日の晩に学生食堂の一角で、お茶とお菓子を片手に気軽にフリートークを行っています。参加者全員がリラックスした雰囲気の中で意見交換を行い、より良い大学にしていくことを目指しています。

７月までに３回開催され、「部活動・サークル活動」「留学・国際交流」「大学院生が集う」をテーマに、各回80人ほどの参加者がありました。

参加者からは、「普段交流が少ない他学部の学生や教員のほか学長、副学長、学生部長と気軽に話ができた」「他大学やもっと多くの留学生との交流もしたい」「学内の交流会・イベントがもっとあるといい」など積極的に意見が交され、気軽なトークの中にも学生と教職員が一体となって大学を活性化していこうという意気込みが感じられる場となりました。

学生・教職員が一緒に語り合う様子

鈴木理事長が公務員志望者に講義

経営情報学部では、今年度から、将来公務員を志望する学生のための基礎ゼミ「行政論入門」を開講しています。

当ゼミは、外部講師を迎えて行う場合もあり、６月30日㈬は、静岡県公立大学法人の鈴木雅近理事長が「地方公務員をめざす諸君に」をテーマに講義を行いました。静岡県庁における副知事、部長などの要職や、企画、福祉、商工、ロサンゼルス駐在など多くの業務に携わった経験、そして公務員に必要な視点などのお話がありました。また、鈴木理事長と学生の間では熱心な質疑応答が交わされました。

名誉教授の紹介、教員人事

■名誉教授（称号付与日：４月１日）

氏　　名	前所属・職名	氏　　名	前所属・職名
廣田　　陽	食品栄養科学部　教授	吉岡　　寿	環境科学研究所　教授
貝沼やす子	食品栄養科学部　教授		

■教員の人事

●就任	（９月１日付け）			（６月１日付け）		●退職	（５月31日付け）	
中山　慶子	男女共同参画推進センター	センター長	三宅　祐一	環境科学研究所	助　教	宮城(大川)栄重	食品栄養科学部	助　教
●採用	（６月１日付け）			（７月１日付け）			（８月25日付け）	
西野　勝明	経営情報学部	教　授	中垣　紀子	看護学部	教　授	仁田　義孝	環境科学研究所	助　教

科学研究費の研究機関別採択率が全国27位に

平成22年度科学研究費補助金の研究機関別採択率（新規採択分）について、静岡県立大学は31.5％（平均22.1％）と、全国27位（公立大学では、滋賀県立大学、首都大学東京に次いで３番目）となりました。

また、従来「はばたき」に掲載していた個々の研究助成採択については、本学公式サイト（ニュース＆トピックス一覧ページ）へ掲載することとしましたので、そちらをご覧ください。

はばたき114号に掲載した平成22年度科学研究費採択状況の記事中、薬学部の野口博司教授が採択されたのが「基盤研究（Ａ）（海外学術調査）」とありますが、「基盤研究（Ａ）」の誤りでした。お詫びして訂正します。

市民公開講座

「女性のための健康薬理学」を開催して

薬学部・薬学研究科　教授　山田静雄

市民公開講座「女性のための健康薬理学」を、日本薬理学会主催で６月６日㈰に本学にて開催しました。「女性の健康」を主テーマとし、慢性・重症化する疾患やその最新の治療法について女性の皆様に広く理解を深めていただく目的で、特に急増している婦人科や泌尿器科系疾患に注目しました。学会理事長の松木則夫先生によるご挨拶に続き、市川義一先生（静岡赤十字病院産婦人科）は、「子宮頸がんの新戦略～子宮頸癌ワクチンによる予防の時代」と題して、1）女性のがんで、子宮頸がんは毎年約3,500人が死亡し、特に20代から30代の患者数が増えていること、2）初期には自覚症状が殆どなく、定期的な検診によって早期発見し、子宮頸部の部分切除や子宮摘出を行うことで死亡率を減らしてきたことを話されました。続いて、近年、子宮頸がんの主な原因とされる発がん性ヒトパピローマウイルスの感染予防のためのワクチンが世界の 90ヶ国以上で用いられ、昨年12月に本邦で承認されたサーバリックスの効果や接種の年齢などについて具体的にお話くださいました。次いで、巴ひかる先生（東京女子医大東医療センター泌尿器科）は、「あきらめないで尿もれ」と題して、咳・くしゃみや運動時にもれる腹圧性尿失禁、過活動膀胱が主な原因となる急に強い尿意が起きるとトイレまで間に合わない切迫性尿失禁や間質性膀胱炎などについて話されました。当日は200人を超す一般市民の方々（９割女性）が参加されました。参加者の年齢層も20～80歳と幅広く、アンケート結果では、「とても丁寧で分かりやすかった」「家族や友人にも聞かせたかった」「このような講座を定期的に開催して欲しい」などの意見が多数寄せられました。本講座が少しでも市民の皆様にお役に立てましたことは何よりであり、喜びに耐えません。

たくさんの市民の方々にお越しいただきました

ひと

日本の韓流現象をリサーチしてこのほど帰国

―現代韓国朝鮮研究センターの蔡芝栄さん―

国際関係学部　教授　小針進

蔡芝栄さん

「日本での韓流は＜冬ソナ＞ブーム後も成長が持続しています」――。現代韓国朝鮮研究センターの客員研究員として約１年間滞在し（日韓文化交流基金招聘フェローシップ）、この９月に帰国した蔡芝栄（チェ・ジヨン）さんは、この間の研究成果をこう強調しました。

蔡さんの研究テーマは「日本人の海外大衆文化消費特性に関する研究」で、量的調査と質的調査を本学滞在中に積極的に行ってきました。「韓流ファンに“韓流好き”になった時期を問うたら、2004年の＜冬ソナ＞直後が44.9％と最も多いのですが、2006～07年が21.3％、08年以降が28.1％でした。ブームが去った後のほうがファンは増えているほどなのです」

蔡さんの本務先は政府系の韓国文化観光政策研究院で、帰国後もここに復帰しました。学部から博士課程まで名門の梨花女子大で学んだ才媛（心理学博士）で、米ジョージワシントン大（1993年）や東大（2002年）での在外研究歴もあります。東大にいた2002年と比べ、日本に変化を感じたかを聞きました。「『韓国から来た』と言うと反応がとても肯定的になりました。韓国に対する具体的な関心を語るのです。明らかに韓国ドラマの影響で、大衆文化の力を過小評価できないと感じました。レンタルＤＶＤ店で韓流モノが豊富になった点、韓流スターのパク・ヨンハ氏自殺に日本人が非常に関心を寄せる点にも驚きました」

ところで、本学でも国際関係学部の学生向けに特別講義をお願いしたことがあります。その時の印象はどうでしょうか。「日本の大学生は授業であまり質問をしないというイメージがありました。ところが県大生は積極的に疑問点をぶつけてくるので感心しました」

工学博士のお連れ合いがいる妻であり、１歳の息子さんがいる44歳の母でもあります。家庭・子育てと研究を両立させながら、本学の、そして日本の理解者としても、日韓間でいっそう活躍することを期待したいと思います。

奨学金をありがとうございました

「日本平留学生基金」入学祝金贈呈式

日本平留学生基金（代表：イトウ秀雄氏）贈呈式が５月19日㈬に本学で行われ、今年入学した学部留学生14人全員（食品栄養科学部２人、国際関係学部７人、経営情報学部５人）に１人ずつ入学祝金１万円が贈呈されました。

日本平留学生基金は、県立大学に在学している主として東南アジアからの留学生に金銭的援助を行うことを目的として平成８年にイトウ氏の還暦記念に設立された基金であり、今年で15年目を迎えました。また、イトウ氏の基金募集の趣旨に賛同した協力者は500を超える個人・団体にのぼります。

贈呈式でイトウ代表は、「他人を尊敬する気持ちを大切にして、よい留学生活を送ってください。」と激励されました。留学生からは、代表の国際関係学部１年・丁ダウンさんがお礼の言葉を述べました。

地元企業からの奨学金

奨学生を募集する企業がそれぞれ論文テーマを定め、応募論文が優秀であると認められた学生に贈られる奨学金です。

「TOKAI奨学金」授与式

㈱TOKAI奨学金授与式が６月21日㈪に本学で行われました。

本奨学金は、㈱TOKAIにより地域に密着した企業の事業の一環として設立され、今年度で19回目を迎えました。

「人口減少社会における企業活動」を論文テーマに募集し、看護学部４年・長坂映里奈さん、国際関係学研究科修士課程１年・鈴木弘隆さん、国際関係学部３年・周亜南さんの３人が選ばれました。

授与式では、㈱TOKAIの真室孝教専務取締役から認定書を贈られ、「奨学金を実りある学生生活に生かすとともに、論文執筆の経験を生かし、これからも社会に良いメッセージを残していきたいと思います。」（鈴木さん）など、奨学生がお礼の言葉を述べました。

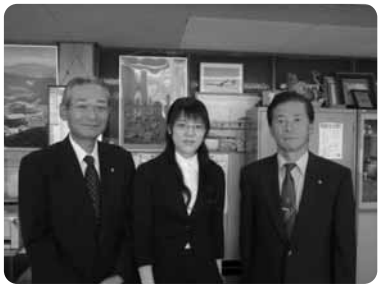
「静岡ガス奨学生」認定証授与式

静岡ガス㈱奨学金授与式が６月24日㈭に静岡市駿河区の静岡ガス㈱本社で行われました。

本奨学金は、静岡ガス㈱により、社会有用の人材育成に寄与することによって地域社会への貢献を図ることを目的に創設され、今年度で11回目を迎えました。

「自分自身の将来像について」を論文テーマに募集し、本学から、薬学研究科博士前期課程１年・清水薫さん、国際関係学部１年・丁ダウンさんが選ばれました。授与式では、静岡ガス㈱岩崎清悟取締役社長から認定証を贈られ、「いただいた奨学金を励みに、これからの留学生活を精一杯努力していきます。」（丁さん）とお礼の言葉を述べました。

「万城食品奨学金」授与式



㈱万城食品奨学金授与式が５月13日㈭に三島市の万城食品本社にて行われました。

本奨学金は、㈱万城食品により中国出身の留学生への奨学金支給を目的として設立され、今年度で14回目を迎えました。

昨年度に引き続き国際関係学部３年・李暁粼さんが選ばれ、㈱万城食品の米山寛代表取締役から目録が贈られました。

「静清信用金庫奨学生」奨学金授与式

静清信用金庫奨学金授与式が７月７日㈬に静岡市葵区の静清信用金庫本部で行われました。

本奨学金は、地域社会の発展に貢献する静清信用金庫の基本方針に従い、次代を担う人材育成を目的に設立され、今年度で14回目を迎えました。

「環境問題に対する企業の役割・姿勢について」を論文テーマに募集し、本学からは、食品栄養科学部４年・渡辺祥子さんと国際関係学部３年・成松友海さんの２人が選ばれました。

授与式では、静清信用金庫の白鳥良作理事長から認定書を贈られ、「一層勉学・研究に励み、目標に向けて努力し、学生生活をより有意義なものにしていきます。」（渡辺さん）など、奨学生がそれぞれお礼の言葉を述べました。

「東海澱粉国際交流奨学基金」授与式

公益信託東海澱粉国際交流奨学基金授与式が７月22日㈭に静岡市葵区の東海澱粉㈱本社で行われました。

本基金は東海澱粉㈱により静岡県内の大学院に在学しているアジア諸国からの留学生への奨学金支給を目的に創立され、今年度で13回目を迎えました。

「私の大学院での研究目的」「私の大学院での研究成果」を論文テーマに募集し、同基金の運営委員会の審議を経て、本学からは薬学研究科博士前期課程１年・リリウィンさん、生活健康科学研究科博士前期課程２年・孫琿玢さん、同じく董蓓蓓さん、国際関係学研究科修士課程１年・ヤントさんの４人が採用されました。

授与式では東海澱粉㈱の増田敏明社長から目録が贈られ、奨学生それぞれがお礼の言葉を述べました。

「清和海運奨学金」授与式

清和海運㈱奨学金授与式が７月23日㈮に本学で行われました。

本奨学金は、清和海運㈱により、地域に密着した企業として経済的に就学困難な学生を援助することを目的に設立され、今年度で８回目を迎えました。

「あなたの考える清水港の魅力と今後の可能性」を論文テーマに募集し、食品栄養科学部４年・小野寺溪人さん、経営情報学部３年・森葉月さん、生活健康科学研究科博士前期課程１年・戸井口恭子さんの３人が選ばれました。

授与式では、清和海運㈱の山本雅明常務取締役から認定書を贈られ、「奨学金の趣旨に叶うよう気を引き締めて勉学に励んでいきます。」（戸井口さん）など、奨学生がそれぞれお礼の言葉を述べました。

「天野回漕店奨学金」授与式

㈱天野回漕店奨学金授与式が７月27日㈫に本学で行われました。

本奨学金は、㈱天野回漕店により「共存共栄」の経営理念に沿って地域社会の発展に努め、地元静岡県の学生の奨学勉励に寄与することを目的に設立され、今年度で16回目を迎えました。

「自国と日本文化の違いについて。また、日常生活で感じていること。」等を論文テーマに募集し、国際関係学部３年・咼滔さん、経営情報学部２年・チャンタンニャンさんの２人が選ばれました。

授与式では、㈱天野回漕店の小長谷修誠取締役社長より認定書が贈られ、咼滔さんが「奨学金を利用し、日本の文化や慣習に触れるような旅をしたいと思います。」とお礼の言葉を述べました。

●地元企業等による本学学生への奨学金（返還義務なし）

名　　称	給付金額	支給期間	応　募　資　格	22年度採用人数
日本平留学生基金（入学祝金）	１万円	一時金	外国人留学生のうち学部新入生	14人
㈱TOKAI	月額５万円	１年間	全学生（研究生、科目等履修生を含む）	日本人学生　２人 留　学　生　１人
静岡ガス㈱	月額５万円	１年間	学部生・大学院生	２人
㈱万城食品	月額５万円	１年間	中国からの留学生のうち学部１～２年生	１人
静清信用金庫	月額５万円	１年間	静岡県内出身の学部１～３年生	２人
公益信託東海澱粉国際交流奨学金	月額３万円	１年間	アジアからの留学生のうち修士大学院生	４人
清和海運㈱	月額５万円	１年間	日本人学生（研究生、科目等履修生を含む）	３人
㈱天野回漕店	月額５万円	１年間	中国・東南アジアからの留学生のうち学部２～３年生	２人
スルガ奨学財団	月額５万円	２年間（３、４年次）	外国人留学生のうち学部２年生	１人（支給は23、24年度）
清水ロータリークラブ	５万円	一時金	外国人留学生のうち、他の奨学金を受給していない学部新入生	７人（21年度実績）

この他にも様々な奨学金がありますので、詳細は　http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/campuslife/life/002/index.html　をご覧ください。

お問い合わせは 054-264-5009（学生室）まで

受　賞

■フォーラム2010：衛生薬学・環境トキシコロジーで実行委員長賞を受賞

９月９日㈭～10日㈮に東京で開催されたフォーラム2010：衛生薬学・環境トキシコロジーで、高田俊介さん（大学院薬学研究科医薬生命化学講座博士前期課程１年）が実行委員長賞を受賞しました。この賞はフォーラムで発表する大学院生に授与されるもので、受賞演題は「海馬シナプス亜鉛の一時的な減少による認知機能と海馬長期増強の阻害」です。「記憶形成に関わる海馬で亜鉛が減少すると、覚えたことを忘れる」ということをはじめて明らかにした研究成果を発表しました。

■情報処理学会シンポジウムで優秀プレゼンテーション賞を受賞

情報処理学会が主催する「マルチメディア、分散、協調とモバイル（DICOMO2010）シンポジウム」が７月７日㈬～９日㈮に、岐阜県下呂市水明館で開催され、大学院経営情報学研究科修士課程１年の阪本敦哉さん（渡邉研究室所属）が下記の論文発表を行い、優秀プレゼンテーション賞を受賞しました。これは、特別講演や招待講演を除く263件の発表の中から優れた発表30件（うち最上位３件は最優秀プレゼンテーション賞）が参加者の投票によって選ばれるものです。

論文名：「スマートフォンによる遠隔地間作業指示支援システムの実装とその評価」

著　者：阪本敦哉、湯瀬裕昭、鈴木直義、渡邉貴之

体験してみよう!「創薬を可能にする科学のチカラ」
“夏休みファーマカレッジ２０１０”を開催

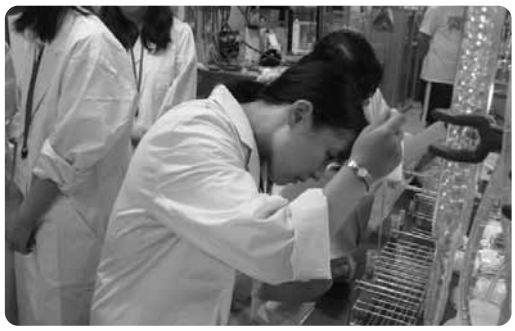
県内高校生を対象とした「夏休みファーマカレッジ」が『体験してみよう!「創薬を可能にする科学のチカラ」』をテーマに８月５日㈭、６日㈮の２日間にわたって開催されました。

この催しは、高校生に大学の最先端研究に用いられている設備、機器を使って薬学の最新知識と技術に触れながら薬学の世界を体験する機会を提供するもので、12回目を迎えた今年は80人の高校生が参加しました。

高校生たちは、白衣に身を包み、「薬の効き方を実験しよう」「遺伝子から体質を調べよう」など10の体験テーマに分かれて教員や大学院生の指導の下、様々な実験に取り組みました。２日目の報告会では、テーマごとに実験結果が発表され、生徒同士による熱心な討論が行われました。

今回の参加者の中からひとりでも多くの生徒が、薬学の世界に進み、次世代の新薬開発や高度医療を担う人材に成長してくれることを期待しています。

ガイダンスの様子


薬の効き目について実験

高校生が経営情報学部の授業を体験！
～オープンレクチュア2010を開催～

経営情報学部高大連携事業実施委員会

「経営情報学部にはどんな授業があるのだろうか」をキャッチフレーズに、高校生を対象とした「経営情報学部オープンレクチュア」（第９回）が、６月20日㈰に開催されました。

経営情報学部では、経営学と情報学の両方の知識や技術を持つ人材の育成に取り組んでいます。実際に高校生に、本学部の授業を体験していただくのが一番と考え、この企画が生まれました。

「企業競争の物語 －あの企業は、なぜ強いのか？－」「世界的経済危機と静岡県 －今、求められる政策は何か？－」「自分の声を見てみよう －音声処理の基礎－」「大学進学は割に合うのか？ －会計学で身近な問題を考えてみよう－」「ＮＰＯは日本社会をどう変えたか？」「コンピュータプログラミング入門 －パソコンで動くプログラムからネットやケータイで動くプログラムまで－」の計６個の授業が行われました。

当日は、あいにくの雨空となりましたが、 多くの方々にご参加いただきました。参加者総数は120人で、その内訳は、高校生86人、保護者34人、教員２人、その他１人でした。どの授業も好評で、「受けてよかった」「楽しかった」「また参加したい」などの感想が寄せられました。

静岡県の経済発展の授業

ケータイで動くプログラムの授業

サマースクール2010＆富士山フィールドワークを開催

大学院生活健康科学研究科環境物質科学専攻　准教授　谷幸則・伊吹裕子

大学院生活健康科学研究科環境物質科学専攻では、８月19㈭、20日㈮に、富士山山麓で１泊２日のサマースクール2010＆富士山フィールドワークを行いました。サマースクールは、環境研究に興味をもつ大学生に、専攻の研究内容を知ってもらうこと、自然環境について考えてもらうことを目的として平成21年度から開催しており、今回のサマースクールには、全国から13人が参加してくれました。

１日目は、研究室での環境実験を体験し、夕刻から「フィールドワーク演習」に合流し、本専攻博士前期課程１年生、教員とともに、総勢57人がバスで裾野市にある富士教育研修所に移動しました。この「フィールドワーク演習」は、様々な環境問題の現場を実体験することを目的として、本年度から本専攻博士前期課程のカリキュラムに導入されたものです。

今回のフィールドワークは、静岡県の重要な自然環境である富士山周辺において、深刻化している「ニホンジカ個体数の増加と森林食害」「人工林と自然林における遺伝子撹乱」をテーマとして取り上げました。１日目の夕食後に、非常勤講師としてお迎えした静岡県農林技術研究所　大橋正孝氏、山田晋也氏、片井秀幸氏に富士山周辺の環境問題について講義していただき、この後の懇親会では、サマースクール生、現役生、教員が一同に集まり、夜遅くまで語り合いました。２日目は、実際のフィールドワーク演習を行いました。朝食後、朝霧高原にある「ふもとっぱらキャンプ場」に向かいました。そこでは、地元の猟友会の方々にご協力いただき、ニホンジカ捕獲、捕獲個体調査や生体試料採取、最後は食肉として利用するための解体実習を行いました。午後は、西臼塚周辺で以前に台風被害で壊滅的な被害を受けた森林の植栽復元現場に向かい、現地での説明を受けました。これらの体験を通じ、生態系保全の重要性について、学生たちが理解を深めてくれたのではないかと考えています。

朝霧高原の「ふもとっぱらキャンプ場」にて

「静岡かがく特捜隊夏祭り2010 in アクト」に出展

環境科学研究所　助教　関川貴寛

浜松市のアクトシティ浜松展示イベントホールにおいて「静岡かがく特捜隊夏まつり2010 in アクト」（静岡新聞社・静岡放送主催）が８月21日㈯、22日㈰に開催されました。両日で約１万400人が来場し、会場は科学実験を満喫している子供たちで賑わっていました。

環境科学研究所は、活性汚泥中の原生動物を光学顕微鏡で観察できる体験コーナーを出展しました。当研究所からは岩堀恵祐教授（地域環境啓発センター長）と関川、また大学院生らがスタッフとして参加しました。本コーナーの展示は８月22日㈰のみでしたが、多くの家族連れ（約300組）が訪れ、顕微鏡の世界を楽しんでいました。

県大コーナー「水をキレイにする微生物たち」の様子

サイエンスフェスティバル in る・く・る 2010に参加して

食品栄養科学部　助教　太田敏郎・伊藤創平・萱嶋泰成

8月7日㈯、8日㈰に静岡科学館る・く・るで開催された「サイエンスフェスティバル2010　青少年のための科学の祭典」（青少年が科学の不思議さや楽しさを実感できるような実験や工作を、大学、高校、科学愛好家などが指導するイベント）に、本学から食品栄養科学部より教員13人と学部生16人が講師として参加しました（別記参照）。8月7㈯、8㈰、14㈯、15㈰日の全4日間で来場者数は1万7千人を超え、科学に興味を持つ多くの子供たちや親子連れでにぎわいました。我々の出展テーマは「ブドウジュースの色はなぜ変わるの？」（酢など身近なものを加えて色の変化を見る実験）、「キイロショウジョウバエのかんさつ」（卵から成虫への成長過程や様々な突然変異体の観察）と「気体って不思議！」（重曹から二酸化炭素の泡を作ってロウソクの火を消す実験）の3つで、合計500人以上の子供たち1人1人に科学の面白さが伝わるよう、丁寧に指導を行いました。実験や観察を楽しんで純粋な笑顔を見せてくれる子供達に、私たち自身も心地の良い刺激を受けました。今回の出展を通じて、子供たちに実験の楽しさと科学への興味を持ってもらえたことと思います。来年度も参加していきたいと思っています。

＜本学から講師としての参加者＞

教員：太田、伊藤創、萱嶋、熊澤、増田、新井、丹羽、石井、井上、佐野、佐久間、吉川、伊藤圭

学生：青木瞳、乾、岩元、大石奈、大塚、加藤恵、木川、佐藤七、佐藤美、富坂、永岡、長谷川、松下、村田舞、諸星、山田弓

子供たちに実験の指導を行いました

講師として参加した本学教員、学生たち

親子で実験に挑戦！　夏休み親子環境教室

環境科学研究所　教授　桑原厚和

環境科学研究所地域環境啓発センターでは、小学生とその保護者の方の環境問題に対する興味を促しその意識の向上を目的とするとともに、小学生が自らの意思で知的世界を探求するきっかけになればと「夏休み親子環境教室2010」を8月7日㈯に開催しました。静岡新聞・静岡放送「静岡かがく特捜隊」タイアップ企画であったため、静岡市内ばかりではなく県内各地からご参加いただきました。

40組の親子が、「空気の汚れをきれいにしよう」「重曹できれいにしよう」「こころ♥きれいにしよう」「光のチカラできれいにしよう」の4つの実験テーマの講義を受けた後、真剣に、かつ楽しく実験に挑戦していました。その後、シャボン玉、スライム、プラ板、マーブリング、不思議な風車等の科学工作に取り組みました。アンケートの結果から、参加者にとって夏休みの楽しい思い出になった様子が伺えました。

「空気をきれいにしよう」のテーマで熱心に説明を聞く子供たち

一生懸命工作に励む子供たち

図書館だより

洪相鉉（コウ ショウ ゲン）氏による寄贈本の展示

静岡県立大学附属図書館は、静岡県を通じ、洪相鉉氏から、韓国で刊行された政治学及び国際関係学を中心とした貴重な資料175冊を寄贈していただきました。

韓国人でドキュメンタリープロデューサーの洪相鉉氏（現在は千葉県在住）は、2007年冬に初めて日本を旅行した際に出会った静岡県人の人柄や静岡県の風土にとりわけ親しみを感じてくださり、その後、2009年に韓国文化放送（ＭＢＣ）の依頼により静岡県西部の企業を、2010年に韓国放送公社（ＫＢＳ）の依頼により県中部のＮＰＯ法人を取材し、韓国の全国放送番組で紹介をされました。この２度の取材活動を通じ本県や本学に対して、経済や文化面での期待を寄せてくださるようになったとのことです。

今回、「韓国朝鮮関係の研究している学生や研究者のために」と、韓国の２つの大学院で映画理論と国際関係学を専攻していた当時から大切にされていた所蔵本を当館に寄贈してくださいました。寄贈本のなかには、多くの専門書のほか、『東亜原色世界大百科事典』30巻があり、韓国語を習得するうえでも参考になると思われます。

現在、当館では「洪相鉉氏による寄贈本展示」を行なっていますので、是非、一度来館のうえ、寄贈本をご覧ください。また、韓国朝鮮関係の研究をするうえでも役立ててください。

この誌面を借りて、洪相鉉氏には改めて厚くお礼申しあげます。

《本学先生方からの寄贈著書》

2010年４月11日から８月12日までに先生方から寄贈していただいた著作資料は次のとおりです。

- **吉村紀子先生（国際関係学部）**
  『海外短期英語研修と第２言語習得』シリーズ言語学と言語教育第21巻　吉村紀子・中山峰治著　ひつじ書房（830.7/Y91）
- **津富宏先生（国際関係学部）**
  『キャリアカウンセラーのためのジョブクラブマニュアル　職業カウンセリングへの行動主義的アプローチ』　ネイザン H. アズリン、ヴィクトリア A. ベサレル著　津富宏訳　法律文化社（366.29/A99）
- **松岡恵先生（看護学研究科（助産学））**
  『看護と研究　　原理と方法』第２版　D. F. ポーリット、C. T. ベック著　近藤潤子監訳　松岡恵他訳　医学書院（492.05/K-7）
- **国包章一先生（環境科学研究所（環境政策研究室））**
  『水道膜ろ過法入門』改訂版　水道技術研究センター編　渡辺義公・国包章一編　日本水道新聞社（518.15/Su51）
- **園部尚先生（名誉教授）**
  『医薬品の開発と生産　レギュラトリーサイエンスの基礎』永井恒司・園部尚編　じほう（499.5/N14）

シリーズ　私の１冊の本

このコーナーでは、先生方がこれまでに読んで感銘を受けた本や印象に残っている本を紹介しています。紹介されるのは、専門分野に関連した興味深い本のほか、専門とは全く別のジャンルの本もあります。授業とは一味違う切り口による専門分野の解説や、思いがけない趣味や人生観の披露などもあり内容も様々です。紹介された本は県立大学附属図書館の書架にあります。読んでいない方は、是非、この機会に読んでください。

食品栄養科学部　教授　中山勉

紹介図書名：『火の賜物　ヒトは料理で進化した』

著　者　名：リチャード・ランガム／著　　依田卓巳／訳

出 版 社 名：ＮＴＴ出版

Ｉ Ｓ Ｂ Ｎ：978-4-7571-6047-7

図書館所蔵：閲覧室２階　469.2 ／ W92

いままで「学生にお薦めの本は？」と聞かれると、本ではなくNHKテレビの「ダーウィンが来た！」を、お薦め番組として紹介してきました。これを見ると、すべての生き物はほとんどの時間を食べるためと子孫を残すために使っていることが実感できます。今回は、お薦めの本として『火の賜物　ヒトは料理で進化した』を紹介します。

著者のリチャード・ランガムはハーヴァード大学生物人類学の教授で、『サイエンティフィックアメリカン』等に優れた啓蒙記事も載せている著名な人類学者です。本書は８章から構成されており、「生食主義者の研究」「料理と体」「料理のエネルギー理論」「料理の始まり」「脳によい食物」の５章は、考古学上の知見（事実）に著者の推論を載せた、非常に説得力のある展開になっています。後半の「料理はいかに人を解放するか」「料理と結婚」「料理と旅」の３章は、料理がヒトの家族、社会、文化に与えてきた大きな影響についてまとめられています。こちらも面白いのですが、前半５章より推測の割合が高く、多くの異論を呼ぶ可能性があります。したがって、ここでは前半の５章を中心に紹介します。

この本の結論を一言で要約すると、「生命の長い歴史のなかでも特筆すべき“変移”であるホモ（ヒト）属の出現をうながしたのは、火の使用と料理の発明だった。」ということになります。人類の祖先は400万年前の猿人（アウストラトピテクス）までさかのぼることができますが、その後、250万年前に最初のホモ属（ホモ・ハビリス）が登場し、脳が大きくなり、骨格全体も現代人に近づいたことが明らかになっています。その後、190万年前にさらに現代人に近い原人（ホモ・エレクトス）が登場し、旧人、新人と続きます。著者の関心は「ホモ属の登場に影響した最も決定的な因子は何か」ということに向けられています。

第１章「生食主義者の研究」では現代人類が厳密な意味での生食（加熱、調理を一切しない食材だけを食べること）を続けると、健康な状態でいられるのは一カ月程度であることを様々な例をあげて述べています。これは現代人の体が料理された食べ物を摂取することを前提とした構造になっていることを示しています。第２章「料理と体」では、料理の利点がまとめられており、安全性と消化性の向上がその中心です。特に加熱調理による、蛋白質の変性、澱粉のゲル化、食品全体の柔軟化等の物性変化への影響が重要であり、「ヒトの口が他の霊長類に比べてはるかに小さいことや、臼歯が小さいこと、胃腸が小さいことなど、すでにホモ・ハビリスのころから変化が始まっていたのではないか」と述べています。第３章「料理のエネルギー理論」では、以上の考察をさらに深め、消化吸収に使うエネルギーを節約することで食物のエネルギー効率が高まり、競争能力や生存率が高まったと考えています。第４章「料理の始まり」では、石器の利用、火打石の発見、火の利用（暖をとる、猛獣から身を護る）と続いて、偶然、加熱された食べ物が美味しいことを発見し、それが料理につながったのではないかと論じています。著者は「料理の始まりはホモ・エレクトスが現れた時期と一致する」と考えているようです。第５章「脳によい食物」では、脳はブドウ糖の大きな消費組織であり、体重比で胃腸の小さな霊長類が“より”大きな脳を持っていることから、ヒトは消化の労力が減った分のエネルギーを脳にまわすことができたのであろうと述べています。そして、最後に、「この結果、料理法の発達は200万年の人類の進化において、他の生物種では見られない継続的な脳の拡大に貢献し、退屈な人間の体に輝かしい精神を宿らせたのだ。」と結んでいます。

字数の制約から、サマリー程度の紹介しかできませんでしたが、他にも「なるほど！」と納得できることが多く、学生・大学院生に加えて、広く教職員の皆さまにも一読をお薦めいたします。

活躍する卒業生・修了生

～国際関係学部・国際関係学研究科編～

浜松の顔として

2010年３月国際関係学部卒業
株式会社うなぎパイ本舗勤務　青井奈津実

このコーナーは、何十年も勤務した方がお書きになると思いますが、私はまだ就職して５カ月しか経っておりません。多少の躊躇を感じますが、在校生と目線の近い私のような者が書いても構わないということなので書かせていただきます。

まず、私の勤務先ですが、春華堂のグループ会社である「うなぎパイ本舗」で、コンシェルジュをしております。これは、工場見学にいらっしゃるお客様に、ツアーガイドをする業務です。うなぎパイ工場で作られるお菓子や設備の説明を中心にガイドしますが、浜松市の観光案内もしております。一日に、多い時で６千人、少ない時でも千人程度のお客様のガイドをしております。外国からのお客さんもいらっしゃるので、英語でのガイドもすることもあります。

いろいろな人々がいらっしゃるので、様々なニーズに合わせた接客を心掛けています。お客様の年齢層、国籍、雰囲気に合わせて、ことば使いを変えたり、内容をアレンジします。多様なお客様のニーズを知らないと仕事ができないので、自分自身もたくさんのことを勉強しなくてはなりません。また、観光案内もしているため、浜松市のこともより一層知らないといけません。浜松市は自分の出身地ですが、お客様の視点を通して新しく発見することもあるので、とても新鮮に感じることもあります。

また、社内報の編集作業もしております。これは新入社員の研修の一環ですが、会社の歴史や社会的意義なども知ることができ、とても楽しい仕事です。これは、県大にいた時に、キャリア支援センター発行のキャリア情報誌『＆You』の編集作業をしていた経験がとても役に立っております。

働くことは、これまで自分の人生の中で蓄積してきたものを一度どこかに移動して、新しいものを吸収してゆく作業であると最近は感じています。こう考えると大学で学んできたものが会社では発揮できないような気持ちがして矛盾を感じることもありますが、何年か経た後、きっと自分なりに仕事に生かしていくことができるようになると、自分に期待しています。

うなぎパイは、浜松市の郷土菓子として全国的知名度が高いと思います。新幹線などで、春華堂の包装をみるとうれしく思います。将来は、うなぎパイ以外のお菓子も知ってもらえるようにしてゆきたいと思っております（しらすパイ、ピオーネのレーズンサンド、麦こがしなどおいしいお菓子がたくさんあります！）。私の勤務先は、浜松市のＨＰからもリンクされている観光情報サイトに掲載されており、浜松市の顔の一つであると自覚するようになりました。私の毎日が地域貢献に結びつくように、一生懸命働きたいと思っております。

笑顔で接客

★次回は、経営情報学部・経営情報学研究科編を掲載します。

エスパルスホームゲームで県大をＰＲ！

７月27日㈫、アウトソーシングスタジアム日本平にて行われた「Ｊ１リーグ　清水エスパルスVSセレッソ大阪戦」に際し、静岡県立大学をＰＲしました。

当日は大学生・高校生の無料招待日であり、静岡市内の大学が紹介ブースを出展しました。本学は、大学オリジナルのうちわ、木苗学長を描いたイラストを使用した消しゴムを配布しながら、オープンキャンパス、剣祭、公開講座を紹介しました。消しゴムのイラストは、昨年度の創造力啓発コンテストで「学長キャラクターの県大グッズ」を発案し、優秀賞を獲得した学生によるものです。

配布には本学の学生も協力し、準備したグッズは1時間ほどでなくなる盛況ぶりでした。

県大オリジナルグッズを配布

オープンゼミの企画・運営で学んだこと

経営情報学部３年　市川誠

７月22日㈭に「やりたい仕事を自分で創る!!」と題し、株式会社アム代表取締役／ＮＰＯ法人フローレンス理事の岡本佳美さんを招き、オープンゼミを開きました。第１部は、経営と情報の両方を学べる当学部の強みを経営情報学部生、院生に再確認してもらう目的で、資源の乏しい中で情報を武器にしてＮＰＯ法人フローレンスを立ち上げた際の話を岡本さんにご講演いただきました。第２部は、就職活動の参考として、「やりたいことで食べていくには」をテーマに、岡本さんと、我々のゼミの担当教員である国保先生にディスカッション形式で、ご自身の体験談を聞かせていただきました。

イベント成功のために、ゼミ生で協力し、試行錯誤するなかで、たくさん課題をみつけました。その中でも、オープンゼミ直後のミーティングで、「人が集まらなかった」というのが一番に課題として挙げられました。国保先生、岡本さんを交えて話し合う中で、ゼミ生達が、企画者でありながら、参加者でもあるという二足のわらじを履いた立場では、イベントの運営は難しい、もっと自分たちの役割をはっきりさせた方が良かったのではないか、など様々な意見が出ましたが、結局、顧客のニーズをしっかり把握していなければ、人は集まらないのだという結論に達しました。

ＮＰＯ法人設立の際の話を紹介する岡本さん

第２部のトークショーで岡本さんが「喜んだ人の数×喜びの質・量＝年収」だとおっしゃっていたように、人に喜んでもらうことはお金を稼ぐこと、すなわち生きることに繋がると思います。幸いなことに、僕は人に喜んでもらうのが大好きです。次のプロジェクトでは今回の反省を活かし、顧客のニーズに沿った、もっとたくさんの人に喜んでもらえる企画にしたいです。

ゼミ活動をよりアクティブに！
ゼミ活性化プロジェクト「Party lab.」開催

経営情報学部３年　鈴木規之

私たち国保ゼミ生は、経営情報学部生がよりアクティブに研究に励んでほしいという思いから、７月７日㈬に経営情報学部ゼミ活性化プロジェクト「Party lab.」を企画しました。プロジェクトの目的は、ゼミ内での議論を活発化させるために親睦を深めることと、それぞれの目標を伝え合い、共有することでした。

プロジェクトの準備にあたって、経営情報学部のほぼすべての先生方の研究室に直接伺いし、ご意見をいただいたり、支援金をいただいたりしました。また、何人かの学生からヒアリングし、ニーズや現状の把握にも努めました。

プロジェクトを企画する過程では、ただ闇雲に方法を議論するのではなく、今まで勉強してきたものを活かして経営学の理論に沿って考えました。プロジェクトのミッションは何か、顧客は誰か、顧客の価値は何か、私たちの成果は何かなど、常に自分自身に問いかけ、より良い価値を提供できるように工夫を凝らしました。準備の途中、プロジェクトの方向性や提供できる価値の捉え方などで、難航した時もありましたが、国保先生の後押しのおかげで予定通りの実施ができました。

議論の結果、ゼミに入ったばかりの学部３年生をメインターゲットと設定して、プロジェクトの告知を行いました。その結果、12ゼミ（約60人）に参加していただく事が出来ました。当日はお菓子や飲み物を片手に、賑やかな雰囲気の中で、自分たちのゼミ活動を振り返りました。具体的には、４つの質問が書かれた模造紙をもとに、各ゼミ内でディスカッションしながら、自分達のやりたいことなどを考えるワークショップを行いました。参加していただいた学生から、ぜひ第二回もやってほしいという声があったときはとてもうれしく思いました。

今回のプロジェクトは、参加者の方々に自分たちがゼミで何を目標として行うかを考えていただくことが目標でしたが、私たち自身も学べることが多かったと思います。プロジェクトの目的や方向性を議論する中で、輪読やケースディスカッションだけでは身に付かないような、目的の把握方法や、顧客の定義の重要性が身に付いたと思います。今回のプロジェクトでも改善点は多く見られました。第二回も企画中ですので、今回の反省点を活かし、次のイベントにつなげたいと考えています。

賑やかなディスカッション風景

スウェーデン視察報告

若者エンパワメント委員会　太田早織（国際関係学部１年）

スウェーデン全国若者会のオフィスで質問する両角（左から二人目）

2010年５月、若者エンパワメント委員会（ＹＥＣ）のメンバーである両角達平（国際関係学部３年）、山本晃史（国際関係学部２年）の２人が、ＮＰＯ法人Rights主催のスウェーデンスタディーツアーに参加しました。スウェーデンでは女性の政治参加が進み、また投票率も85％と非常に高いなど、国家全体が民主主義を意識しています。私たちＹＥＣが取り組んでいる若者のエンパワメントの力も、もちろん強い。

スウェーデンでは、様々な施設や団体を訪問しました。

まず、初日に訪問したスウェーデン全国若者会は、日本で言う青年団のような存在です。この組織の目的は、国や地方での意思決定に若者が参加し、その決定に影響を与えること、さらに若者同士が刺激し互いに高め合うミーティングプレイスや、若者のリーダーを養成するための技術や経験の場を提供することです。実際、ここで正規の職員として働きながら政党と若者をつなぐためのロビー活動を行っていたのは、23歳の青年でした。

２日目に訪問したスウェーデン全国生徒会（ＳＶＥＡ）は生徒会のトップ的組織です。ＳＶＥＡは、なるべく多くの生徒会が学校における予算、環境、スケジュール、政策、教職員の採用について影響力を持てるようになるべきだと考えています。そのほか、Gamla Uppsala学校では、小学生の授業見学をし、教師が生徒を信頼しているからこそできる授業が展開されていました。また教師が生徒の声を最大限に聞き入れ、生徒と共に学校生活を作り上げているのだ、という印象を受けました。

そして、最後に、スウェーデンの若者団体の連合体であるスウェーデン青少年協議会（ＬＳＵ）を訪問しました。ＬＳＵは「若者の手で若者の為に」をスローガンに掲げ、若者の意見を国の政治に反映させることを重要な使命としています。毎年、代表を国連の総会に送り込み、国連の会議でスピーチをするほか、ＥＵのユースイベントにも参加するなど、ＥＵ各国政府等に対しても若者政策のロビイングや提言を行なっています。

また、ストックホルム中央駅周辺で、100人の若者に意識調査アンケートを行いました。これは、以前、静岡の若者106人に行ったアンケートと同じものですが、その結果は大きく異なるものとなりました。例えば、「社会は自分の力で変えられるか」という問いに、スウェーデンでは「思う」「どちらかといえば思う」が65％を占めましたが、静岡では24％にとどまっています。

スウェーデン視察の後、「18歳選挙権の早期実現を求める要望書」を副官房長官に提出するために首相官邸を訪問しました。出席者は、福山哲郎氏（副官房長官）、阿久津幸彦氏（首相補佐官）、本多平直氏（衆議院議員）、管源太郎氏（ＮＰＯ法人Rights代表理事）小林庸平（同副代表理事）、そして山本晃史（国際関係学部２年）です。面談時間を30分ほどいただき、そのうちの５分間で、ＹＥＣ紹介と静岡とスウェーデンで行った若者100人アンケートの説明、スウェーデン訪問の報告を行いました。そこで、Rights副代表理事の小林氏が「今のスウェーデンは30年で出来上がった。スウェーデンの大人たちは“今の若者は自分たちがあの年齢の時では考えられないほどに議論ができる”と言っている。日本も頑張れば30年後にはスウェーデンのようになれる」と話していたことが印象的でした。

スウェーデン視察を行って、最も強く感じたのは“若者が主体となる、スウェーデンのような社会の実現”と“今の日本に対する危機感”です。今回スウェーデンの様々な若者主体の施設訪問をしたことは、若者が活きる社会がどんな社会であるか、実践的な理解となっただけでなく、これから私たちＹＥＣが目指すべき社会のありようについて改めて問い直す、素晴らしいきっかけになりました。スウェーデンでは、大人と若者が対等であり、大人は若者の声を聞こうとするからこそ若者も自分たちの声を届けようとするのだ、と強く感じました。また今回の視察で最も印象に残っているのは青年事業庁の職員さんの言葉、「若者は社会の問題ではなく資源である」です。大人が若者を社会の一構成員（市民）であると認識しており、また若者自身もそれを自覚しているように思います。今後はこのオモイをカタチにすべく、日本で、静岡で、「できること」から始めていきたいと思います。

・若者エンパワメント委員会（ＹＥＣ）のブログ　http://ameblo.jp/youth-empowerment/
・ＮＰＯ法人Rightsのブログ　http://www.rights.or.jp/

県大生ピックアップ！

両角達平さん（国際関係学部３年）
若者エンパワメント委員会（ＹＥＣ）代表
長野県出身、21才

両角さんが代表を務める若者エンパワメント委員会（ＹＥＣ）は、若者の自己実現を支援する県大生らの団体。去年の４月に設立以来、シンポジウムの開催や高校への出前授業、スウェーデンへの視察等、活発に活動を続けています。

ＹＥＣを始めたきっかけは － 自分の出身地には、中高生が勉強やダンスの練習などで自由に集まることのできる施設があり、自分もよく顔を出していました。静岡にはそういった施設がないと知り、ないなら自分で作ろうと思ったのがきっかけ。当初は、施設というハード面について考えていたが、今は場所だけでなく、若者がやりたいことを後押しするイベント開催などソフト面も重要だと考えています。

ＹＥＣを始めて変化したことは － 忙しくて寝不足（笑）。あとは、社会人とのつながりが増え、社会の仕組みがどんどんわかるようになってきて面白い。

これからどんな活動をしていきたいか － 今までやってきたＹＥＣの活動の中で、とりわけ５月に訪れたスウェーデンでの若者支援の取り組みに刺激を受けました。もう一度、スウェーデンへ行き、大学で若者政策をきちんと学んで、現地の若者支援を体に染み込ませたい。将来も若者エンパワメントに関わっていきたいので、その拠り所となるものをつくって帰ってきたい。

ＹＥＣは、随時メンバーを募集しています。興味がある人は、気軽に poc1220@gmail.com まで。

星・木苗杯開催される

実行委員　大学院生活健康科学研究科博士前期課程１年　吉永祐美子・小鹿洋輔・荻野彰子・長澤友樹

恒例となっている食品栄養科学部テニス大会が、今年から星・木苗杯と名称を改めて７月18日㈰に開催されました。当日は天気にも恵まれ、焼けるような暑さの中、皆大いにテニスを楽しむことができたと思います。参加者40人中、男子では新井英一先生が、女子では松岡真里奈さん（食品栄養科学部４年）が優勝し、今年度新調されたトロフィーを勝ち取りました。また、試合終了後に懇親会が開かれ、普段話す機会が少ない教員、学部生、大学院生が大いに親睦を深めることができました。今年は20回目となる節目の大会で、皆、笑顔にあふれ、とても楽しそうにプレイしていたので、実行委員一同は本大会を運営して本当によかったと思っています。来年はさらに参加者が増え、より実りある大会にできたらと思います。

静岡の人々にも国際協力を広めよう！
～「Let's ちょっと Chat!2010」開催～

静岡学生ＮＧＯあおい　清水知佳（国際関係学部３年）

今年６月20日㈰、私たち「静岡学生ＮＧＯあおい」は青葉シンボルロードにて国際協力イベント「Let's ちょっと Chat!2010」を開催しました。このイベントは、国際協力を目的とするＮＧＯ（全13団体）を招いて、それぞれブースを設け来場者の方々と気軽に話せる場を作り、静岡の人々が国際協力を身近なものに感じ、そこから何か行動を起こさせるようなきっかけになれば…という思いで企画したものです。今年で５回目となるこのイベントですが、今年のテーマは「まきこむ」とし、今回はさまざまな「新たな試み」に私たちは挑戦しました。中でも一番大きな試みであったのは、「屋外での開催」です。第４回までは屋内で行われていて、どうしても閉鎖的になってしまうことが難点となっていました。しかし今回は静岡の繁華街での開催が実現し、人々により気軽に足を運んでもらえることができました。梅雨の時期ということもあり、当日は、一時中止を考えざるを得ないほどの大雨にみまわれました。しかし参加団体の方々の協力もあり、無事に外で最後までやり遂げることができました。大雨により受けたダメージは大きかったですが、それ以上に強い私たちの想いがこのイベントの成功に繋がったと思っています。今回は来場者数も多く成功したと言えますが、果たして本当に静岡の人々が国際協力に関心を持ち、後押しができていたのか…という点ではまだまだ見直しが必要であると考えています。自己満足に終わらずに、今後も活動に励み、常に前進していきたいと思います。

夢のエコパスタジアム

サッカー部キャプテン　青木雄志（経営情報学部３年）

７月17日㈯、私達サッカー部はエコパスタジアムで試合をしました。「第26回静岡学生サッカー選手権大会」という大会の決勝戦の舞台としてエコパスタジアムを使用することができました。大会方式としては、ＡグループとＢグループに分かれ７チームでのリーグ戦を行い、その後両グループ間で決勝戦、３位決定戦、５位決定戦をするといった方式をとっています。私たちサッカー部はＡグループで５勝１分という成績で１位となり、Ｂグループ１位との決勝戦に駒を進めることができました。

サッカー部は現在20人にも満たない人数で活動をしています。決して多いとは言えない人数なのですが、私が入部したころはもっと部員が少なく、試合をするのにも11人ギリギリで戦うということが度々ありました。そのなかで結果を追い求めるというのはなかなか厳しいものがありました。この時に比べれば現在の状況は非常に好転していると言えますし、実際、普段から充実した練習をすることができるようになりました。エコパスタジアムで試合をすることが決まってからのモチベーションも高く、非常に良い雰囲気であったと言えます。

そして、試合当日を迎えました。決勝戦の相手は静岡産業大学磐田でしたが、結果は残念ながら０－１で負け、惜しくも準優勝となってしまいました。しかし、準優勝という結果よりも大きな経験をすることができました。プロが使用するスタジアムで試合ができるということはほとんどないし、一生の中でも大きな経験になりました。

９月４日からは別の大会が始まっています。前期の大会で準優勝という結果を残したので後期の大会でも結果が求められてしまうと思います。プレッシャーを感じる部分もありますが、結果だけを追い求めても後には何も残らないと思うので、１試合１試合を楽しみたいと思います。県大グラウンドで開催される試合もあるので、是非一度応援に来てください！

試合後の記念撮影

ふじっぴーも応援

ニュース＆トピックスを公式サイトへ！

教職員・学生の皆さんの受賞、研究成果の発表、研究助成採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル活動報告、ボランティア活動など様々な情報について、県大公式サイトへの掲載をお願いします。また、はばたきへの寄稿もお待ちしています。

公式サイトへの掲載方法は、以下のページをご覧ください。

公式サイトトップページ ➡ 学内専用情報 ➡ 情報発信について ➡ 公式サイトにイベントとニュースを掲載する方法

はばたき寄稿は、広報室（はばたき棟３階）へお願いします。

E-mail:koho@u-shizuoka-ken.ac.jp

発行：広報委員会
お問い合わせ先：静岡県立大学事務局広報室（ＴＥＬ　054－264－5130）
静岡県立大学ホームページアドレス：http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/